

楊 達 と 入 田 春 彦

～台湾人プロレタリア作家と総督府警察官の交友をめぐって～

張 季 琳

一 はじめに

台湾文学史に重要な足跡を遺した楊達（1905-85）の生涯と作品を考察するにあたり、彼の生涯に大きな影響を与えた幾人かの日本人の存在を忘れてはならない。総督府警察官であった入田春彦（1909-38）もまたその一人である。入田春彦との交友はきわめて短期間ではあったが、この交友は楊達の文学活動にとっては一大転機をもたらすきわめて重要なものであった。この入田春彦との交友自体はすでに知られており、またこの交友が楊達の作家生活に与えた重要な意義も楊達研究者の間ではつとに認識されている。しかし、入田春彦がこれほど重要な人物でありながら、これまでのところ彼の出身地はおろか経歴も背景もまったく不明であり、彼と楊達との関わりについても詳細はなにも判っていない。

筆者は数年来楊達と入田春彦の交友に関心を懐き、調査を進めてきた。筆者はまず入田春彦および楊達と入田の交友についてのこれまで知られてはいながらあまり活用されていなかった諸資料を収集してきたが、さらに入田の出身地をつきとめ、遺族とも面談することができた。その結果入田の生涯についての未知の部分に光をあてることができ、また、魯迅文学の紹介などの点で、入田が楊達に与えた影響がこれまで考えられていたよりもさらに大きなものであることを確かめることができた。

二 楊達と入田春彦との出会い

1934（昭和9）年に、楊達は「新聞配達夫」という日本語小説によって東京ナウカ社刊の左翼文芸誌『文學評論』の懸賞募集の第二席（第一席なし）に入選した。この作品は同誌第1巻第8号（1934年10月）に掲載されている。こうして楊達は日本の文壇に躍り出た初めての台湾人作家となったのである。「新聞配達夫」はさらに魯迅の弟子である胡風（本名張光人、1904-85）によって「送報伏」という題名で中国語に翻訳され、1934年上海の『世界知識』に掲載された。

楊達は1935年に文芸雑誌『臺灣新文學』¹⁾を創刊したが、総督府警察の検閲などが原因で、1937年にはこれを廃刊した。彼は同年6月に東京に行き、『文藝首都』、『日本學藝新聞』、『星座』などの編輯責任者と会って、台湾人作家の作品発表の場を求めたが、9月には失意のまま帰台している。さらに彼は、肺結核に罹って咯血に苦しみ、妻の葉陶も過労のため病に倒れた。極度の困窮に陥った彼は、とうとう20円の借金のために米屋から裁判所に訴えられてしまう。日本人警察官入田春彦が彼の前に現れたのはまさにこの時である²⁾。

戦後、楊達がこの入田のことをはじめて詳しく語るのは、1976年に台湾の作家宋澤萊のインタビューに応じたときのことである³⁾。

私はすでに一文無しで、米屋に二十円も借金があり、返す力はありませんでした。多分日本人

警察官が米屋の主人をそそのかして、私を訴えさせたのだろうと思います。おもしろいのはその時『臺灣新聞』学芸欄編輯者の田中がある日本人警察官を連れて私に会いに来たことです。彼は入田という姓で、かつて「入田春言」という文章を書き、その文章の中でとても私に会いたいと書いてありました。彼は私の惨めな落ちぶれた生活を見ると、私に百円もの援助をしてくれました。負債はこれによって綺麗に返すことができ、農場も買えました。(筆者訳)

この農場は後年の楊達の談話とその遺族の回想によれば、実は買ったものではなく借りたものである。また、楊達は米屋が自分を訴えたのは警察官に唆されたためと思いこんでいる点も興味深い。たしかに入田と知り合うまで彼は警察官一般に対して好感情を懐いていなかった。例えば、彼の「新聞配達夫」では台湾人主人公の兄は巡査になったがために、その母親から義絶されているのである。しかし楊達は警察官入田の援助によって一大難関を乗り越えたのである。ここで「入田春言」と言っているのは入田春彦の名前をインタビューアーが聞き間違えたものと思われる。

1980年になると、楊達は自ら「光復前後」という文章を書いて入田についてさらに詳しく語り、はじめて入田が文学愛好家であったことを以下のように述べている⁴⁾。

こんなどうしようもない時、ある日、『臺灣新聞』文芸欄の主筆田中保男が、入田春彦という人を連れて訪問した。彼らはみな日本人だった。田中さんの紹介によると、入田春彦は警察官で、かねてより文学を好み、かつて私の「新聞配達夫」を読んだことがあり、早くから私と会って雑談したがっていたとのことだった。あの時、私は食事すら満足にできず、よく何冊かの本を賣っては、いくらかのお金に換え、紙袋一杯の米を買っては、粥を煮て命を繋いでいた。二人の日本人の友達はこんな光景を見て、わざと酒と肴を買ってきた。みなで飲みながら雑談した。入田春彦は私の当時の状況を知ると、すぐ百円をとり出して助けてくれた。彼らが帰ってから、私は米屋と雑貨屋の借金を綺麗に返したが、三十円しか残らなかった。この三十円を使って借りた土地の頭金は払ったが、一挺が一円の鋤さえも買えなかった。結局他の人に借りるしかなかった。(筆者訳)

1982年8月、77才の楊達はアメリカのアイオワ大学の招聘により渡米後、その帰途に五十年ぶりで来日し、内村剛介、戴國輝両教授と対談したが⁵⁾、以下すべて「対談」と記す)、ここでも楊達はほぼ同じ趣旨のことを語っている。

そういう困りはてていた時に、私に助けの手をさしのべてくれた人がいたんです。彼は入田春彦(いりたはるひこ)という日本人警察官でした。ある日、私の家に、台湾新聞社の学芸部員の田中保男と一緒に、見知らぬ日本人の青年が訪ねてきた。私は田中保男とは、前々から親しかったのです。その見知らぬ青年は警察官で、私の「新聞配達夫」を読んで感動し、作者である私に是非会いたいからと、『台湾新聞』の学芸部に頼みこんだという話でした。二人は酒とおかずを持参してきたので、その晩は飲んで楽しく語りあかした。夜更けになって、二人は帰っていった。帰りがけに、その見知らぬ日本人青年は、使ってくださいといい、私に百円の大金を手渡していたのです。私はその百円で、米屋の借金も払い、残りの金で二百坪の土地を借り、農園をはじめることができた。この私にとって、救い主ともいえる初対面の日本人青年が、入田春彦だったわけです。私は自分の畑を「首陽農場」と名付けました。

いずれにしても、楊達の語るところをまとめれば、文学を愛好する若い日本人警察官入田が楊達の

「新聞配達夫」を読んで感動し、1937年秋頃にわざわざ楊達を訪問し、楊達が貧窮に陥っていたことを知るや即座に100円という大金を手渡して、彼を苦境から救ったということになる。

三 宮崎県から東京・台湾へ

「対談」の中で楊達は、入田の出身について次のように語っている。

経歴はなにもわからない。かれは自分のことは、なにも語ろうとはしなかった。警察の同僚にたずねてみても、ちっとも教えてくれないんです。入田さん九州の人で・・・なんでも熊本県出身だという話を、ぼんやり聞いたような気がします。

しかし、筆者は後述の台湾総督府の『警察職員録』などの閲覧によって入田春彦が熊本ではなく宮崎県出身であることを確認し、さまざまな調査の末に宮崎在住の入田春彦の遺族に面会することができた⁶⁾。入田遺族の証言、戸籍謄本など関係資料に基づいて入田春彦の生い立ちをまとめるとほぼ以下の如くである。

楊達は「対談」では「いりたはるひこ」と読んでいたが、実際は「入田」という姓は「ニュータ」と読む。入田春彦（ニュータ・ハルヒコ）は1909年（明治42）3月5日に「宮崎県東諸県郡高岡村大字内山三千百六番地」の入田安之進の跡取り息子として生まれた。1915（大正4）年出版の『宮崎縣大観』⁷⁾は春彦の父安之進、また安之進の実兄で農学教育関係の仕事をしていた川添龜之進を紹介している。入田家はいわば知識階級に属し、その生活もかなり安定していたようである。しかし、1916（大正5）年に父親の安之進が妻すなわち春彦の母を亡くして、自営農業を始めたころから入田家は経済面で次第に苦しくなっていたという。

入田の末妹の江藤タツの話では、入田春彦は高岡小学校を卒業後、さらに旧制宮崎中学校を卒業し、一時期東京府庁に公務員として勤務した後、台湾に渡ったという。妹タツの印象では兄春彦はとても優しい、思いやりのある兄で、東京にいたときも、台湾に渡ってからも、毎月10円か12円ぐらいの金を故郷の家族に送っていたという。やがて父の安之進は春彦の後を追って台湾に渡ったが、まもなく病気で世を去った。しかし、妹タツは兄の春彦がいつ東京に行ったのか、またいつ台湾に渡ったのか、父親の安之進がいつ台湾に渡ったのかははっきりとは覚えてはいない。戸籍謄本の記録によれば、入田安之進は1935（昭和10）年の8月19日に63才で「臺灣臺中州の南投郡中寮庄郷親寮324番地」で死亡している。この死亡届の提出者は入田春彦である⁸⁾。

筆者は東京都立公文書館において当時の東京府庁の職員録と臨時雇員の名簿を調べてみたが、入田春彦の名前は見当たらなかった。また、宮崎中学校に入田の遺族⁹⁾が問い合わせたところ、学籍簿などは十年保存であることがわかり、したがって入田春彦の名を探すことはもはやできなかった。一方、『臺灣警察時報』などの調査によれば台湾総督府警察官としての入田の略歴はほぼ以下の通りである。

①1931（昭和6）年9月

警察官部乙科第179回生に属し、9月22日に入所、9月23日より6ヶ月間の訓練を受ける。

（『臺灣警察時報』昭和6年10月号「練習所通信」, 42頁）

②1932（昭和7）年3月28日

第180回警察官部乙科修了、臺中州に配属される。

(同昭和7年5月号, 114頁)

③1932 (昭和7) 3月28日

「任免辞令:『臺中州 巡査 (40) 3月28日 入田春彦』

(同昭和7年9月号, 171頁)

④1932 (昭和7) 年11月1日現在

「台中州 南投郡 巡査 月40 入田春彦 宮崎」

(『警察職員録』昭和8年版, 74頁)

⑤1933 (昭和8) 年11月1日現在

「台中州 南投郡 巡査 月41 入田春彦 宮崎」

(同昭和9年版, 76頁)

⑥1933 (昭和8) 年12月25日現在

「月俸42圓ヲ給ス 台中州巡査 入田春彦」

(『臺中州報』第969號, 453頁)

⑦1934 (昭和9年) 11月1日現在

「台中州 南投郡 巡査 月42 入田春彦 宮崎」

(『警察職員録』昭和10年版, 79頁)

⑧1936 (昭和11) 年5月18日

「任免移動: 台中州 新高郡 5月18日 巡査 入田春彦」

(『臺灣警察時報』昭和11年7月号, 202頁)

⑨1937 (昭和12) 年7月1日現在

「新高郡 KANETOWAN 警察官吏駐在所 巡査 月45 入田春彦 宮崎」

(『臺中州及所屬團體職員録』昭和12年版, 80頁)

⑩1937 (昭和12) 年11月1日現在

「臺中州 臺中警察署 巡査 月45 入田春彦 宮崎」

(『警察職員録』昭和13年版, 74頁)

⑪1937 (昭和12) 年12月18日現在

「昭和12年12月18日 臺中州巡査 入田春彦 依願本職ヲ免ス」

(『臺中州報』第1782號, 469頁)

ところで、当時の台湾で巡査になるためにはどのような経歴が必要だったのだろうか。元台湾総督府警察官および司獄官練習所教官であった鷲巢敦哉に『臺灣総督府警察沿革誌』、『警察生活の打明け物語』、『臺灣警察四十年史話』¹⁰⁾など台湾警察についての好著があるが、入田との関連で直接参考になるのは、むしろ同じ宮崎県出身で、1934(昭和7)年から1942(昭和17)年まで台湾の高雄で警察勤務していた吉岡一二氏の回想である。同氏は筆者の問い合わせに答え、1997年7月2日付けの書簡で当時の台湾警察官募集・養成のこと、警察官養成練習所の学科と訓練のこと、そこの生活のことを次のように詳しく具体的に書いてくれた。

お尋ねの台湾警察官募集・養成のことですが、その項(敗戦の前は)台北市八甲町に立派な施設の、台湾全島の警察官養成の練習所があって、この学校には常時巡査養成の乙科生4班位(1班60名)240名位が入学して6ヶ月学んで巡査に任命、台湾の各州庁に配属されていました。先生は台湾総督府の事務官と、各州から出向した現役の警部の皆さんでした。この乙科生はこ

の学校の教官が試験官になつて、3人1組で内地（当時の日本国内）を募集、試験をして廻り、学歴は問はないで国語、算数、作文の筆記試験と、面接試験をして嚴重な身元調査をして、採用していました。1年の間に何回か乙科生の募集があつて、60名（1班が）が次々と入学をして、学校には常時240名位の乙科生が居た訳です。私も小学校しか出ていませんが、いろいろと勉強をして、やっと合格したものでした。（推薦の必要はなかったのです）

その頃台湾の巡査は内地の巡査よりも、月給が35円と5円程高かつたので人気があつて応募者が多く、1つの試験場にいつも50名位が集まって、その中から2名3名位しか合格しませんでした。合格者の中には大学卒も数名居ました。1回の募集人員が60名位で、当時の中学校卒が大部分、小学校卒は少ない方でした。試験は大変難しいものでした。（特に小学校しか出てない人は）

学校での訓練ですが、学校は全寮生で立派な寮があつて寮での生活は当時の軍隊と同じ位きびしいものでした、学科の勉強は、刑法、刑事訴訟法、商法、民法、憲法等でした。試験が毎月1回あつて、競争が激しく、大変でした。実科として、軍事教練、柔道、剣道があり、これも試験がありました。こんなことで健康な人ならどうにか卒業したものです。寮で自習をするのですが、限られた時間に大変な努力をして、自習をしたのです。

吉岡氏の述べるところからすれば、入田の場合もやはり日本国内で嚴重な身元調査を受け、さらに筆記試験に合格した後、台湾に渡って、台北の警察官養成訓練所に入り、そこで厳しい教習と訓練を受けたものと思われる。

1931（昭和6）年10月15日『臺灣警察時報』第41号所載の「練習所通信」というコラムでは「三宅生」が「第179回生第5班入所」について述べている。同人はまた同誌同号の「新入會員紹介」に60名の練習生の名前とその出身地を挙げているが、その中に第21番目として「入田春彦（宮崎）」という名前を見出すことができる。このように入田は1933（昭和6）年の9月22日に、ほかの内地から応募してきた人々とともに警察官部乙科第179回生・第5班として入所して、23日より正式に6ヶ月間の訓練を受けはじめたもようである。そして前に挙げた「練習所通信」コラムの中にも「建功神社参拝第五班」、「博物館見學の第五班」という二枚の写真が掲載されているが、これらの写真は不鮮明で入田の顔を識別することはもはやできない。

1932（昭和7）年5月『臺灣警察時報』第49号の同じく三宅生「練習所通信」というコラムには3月28日「第180回警察官部乙科修了生第6班」終了式のことを記されている。元第179回生・第5班に属していたはずの入田春彦の名がなぜかこのコラムにも登場し、しかも台中配属と記されている。現在入田家親族の手元に残されているただ一枚の入田親筆の葉書¹¹¹は、彼が台湾から二番目の姐リツとその夫君梅橋秀雄宛に出したものであるが、これによると警察官養成訓練所のあまりに厳しい訓練のために、入田は一時病に倒れたようである。そのために修了が一回遅れたのであろう。

さて、巡査になった入田についての筆者の問い合わせに対して、入田春彦の上司であった元南投郡巡査部長の瀧澤政比古氏は1997年5月15日付きの書簡で以下の如く回答している。

扱てお尋ねの入田春彦君の当時の詳細ですが、現在私の記憶にあるものは残念乍ら極めて少く、入田君は当時南投郡警察課の外勤勤務の独身巡査でした、若く、美男で物静かな、何となく淋しい様子の孤独な青年との印象で見えていましたが、勤務は普通だったと私は見ていました、私は入田君と話を交わした記憶は全く浮かびません。入田君の自殺のことを後になって聞き、

洵に残念に思ひましたが、何が原因だったか南投勤務当時から全く思ひ当らない事でした。

楊達も「対談」では入田の印象を「大学をでたばかりぐらい、二十四、二十五というところかな。物静かな男だった」と述べている。実は入田は当時すでに30才であった。彼は大学卒という学歴はなかったと推測されるが、地方名士の家庭に生まれ、また文学青年であった彼には一種の育ちの良さが感じられたために、楊達は大学出という印象を得たのであろう。

若い日本人警察官入田はまるで救いの神のように、困窮していた楊達の前にふと現れ、楊達に100円という大金を手渡した。当時の入田の基本月給はわずか45円であり、しかも彼はその給料の中から家族に送金もしていたのである。月給の二倍以上の100円という大金を初対面の一台湾人作家に与えるということは大変な決断であったといわねばならない。こうして彼と楊達との交友が始まるわけであるが、この交友は家族ぐるみのきわめて親密なものであった。筆者が楊達の次男で、『楊達全集』編集と楊達記念館建設にも携わっている楊建（現在64才）の世話で1997年5月に長男楊資崩へ電話でインタビューを行い、さらに同年9月に花園を経営している楊資崩に自宅でインタビューを行ったが、この時、楊資崩（当時66才）は入田の思い出をいろいろと語ってくれた¹²⁾。それによれば、楊資崩（当時6才）はよく入田のアパートに遊びに行き、お菓子などいろいろな物をもらっていた。入田が子供の本を与えたときには同書を読んでくれた。またしばしば「勝って来るぞと勇ましく」のような日本の軍歌を教わったという。いまになってもはっきりと歌えると、資崩には筆者にその歌を歌って聞かせてくれた。入田が楊達と楊資崩とともに写っている当時の写真が一枚いまでも残されている¹³⁾。

四 「赤化」警察官の自殺

ところが、1938年の5月に、入田春彦は突然楊達夫婦宛に遺書を残し、自殺してしまった¹⁴⁾。入田は生前自分の家庭については何も話さなかったため、楊達は彼の遺族に遺骨を渡すことができなかった。結局、楊家ではその遺骨を10年間も自宅に預かることになる。戦後楊達は国民党政府によって1949年から12年もの間投獄され、その間にも国民党政権下の警察は頻りに彼の留守宅の家宅捜索を行った。当時18才の楊資崩は知り合いであった寶覚禅寺の住職林錦東の斡旋で入田の遺骨をその寺に無料で納めることにしたのである。寶覚禅寺は台中市内にあり、戦前から中部台湾に眠る日本人の遺骨安置所として有名である。1997年5月、筆者はこの寶覚禅寺を訪ね、1950（民國39）年3月30日に楊貴（楊達の本名）と葉陶の名義で納められた入田の遺骨の存在を確認することができた¹⁵⁾。

戦後、楊達は入田の死について生涯三回に亘って語っており、1976年の「不朽的老兵」というインタビュー記録では次のように述べている。

入田はその後よく私の所に出入りして、日本警察界の暗黒面を暴露する文章を多く書いており、そのため一部の人々の恨みを買って、日本警察に強制的に追放された。出発の前の日が来ると、彼は私宛に手紙をよこして、夜に私に会いたいと言ってきた。私が行ってみると、彼の部屋のドアはしっかりと閉じてあった。隣の人があるのを待ってドアをこじ開けた。彼はすでに睡眠薬を飲んで自殺し、ベッドの上で亡くなっていた。遺言の中で私に後の始末を依頼していた。私は新聞に一篇の文章を書き、この事を記しておいた。（筆者訳）

しかし、後に楊達は自ら書いた「光復前後」という文章では別の証言を行っている。

入田はよく私の家に入出入りし、手伝ってくれた。また私に百円を贈ったことで派出所に捕まえられ、何日間も閉じこめられた。その後日本側は彼を釈放することに決めたが、はるか台湾を離れ、日本に帰るように彼に強制した。彼は釈放される前、人に頼んで私に次の朝の7時に彼の所へ会いに行くようにというメモを私に渡した。翌日私は約束通りに7時頃彼のドアの前まで行った。部屋の中からひとしきり胡琴の音が聞こえてきたが、ドアを叩いても誰も応じてくれなかった。ドアの鍵は掛けてあるが、胡琴の音がとぎれにとぎれに伝わってくる。私はとてもおかしいと思い、急いで近くに住んでいるおぼさんの所へ鍵を取りに行った。戻ってきたら胡琴の音はすでに止んでおり、ドアを開けると、入田は懐にあの細い胡琴を抱いたまま、すでに畳のうえで意識をなくしていた。実は彼は日本に送還されることを知った後、すでに死のうと決心していたのだ。彼は側に二通の遺書を残していた。一通は私宛で、中国人に対する思いを述べたものであった。もう一通は私の妻の葉陶宛で、葉陶に彼の遺品を整理するように頼み、そして彼の遺骨の灰を肥料として、私の花園の土にまいてほしいと書いていた。二番目の頼みはその通りにするわけにはいかなかった。私たちはいろいろ手を尽くして彼の日本にいる家族に知らせようとしてきたが、うまくいかなかった。今でも、入田の遺骨はまた台中の寶覺寺に預けたままである。(筆者訳)

1983年の「対談」の内容はまた少しく異なっている。

そのうちに、入田春彦は警察官をやめ、ちょいちょい遊びにくるようになった。1938年(昭和13)に入ってからです。入田春彦は警察につかまり、四、五日間、拘留を受けた。そして、台湾から日本内地への退去を命ぜられたという。彼は台湾にいられなくなったのです。釈放されて、数日もたたないうちにでした。入田からのメモがとどいた。みると、今夜の七時にきてほしいと走り書きしてある。私が彼の下宿につくと、部屋からは苦しそうな息づかいが聞こえた。私もすぐに察しがつき、家の中に飛びこもうとしたが、鍵がかかっている。管理人のおぼさんから合い鍵をもらって、部屋にかけこみました。彼はすでに意識不明の状態だった。なにか夢でもみているのか、私の長男資崩の名を、何度も何度も叫んでいた。大量の睡眠薬をのんだので、覚悟の自殺でした。病院にかつぎこんだのですが、手遅れだった。三日目から四日目に、入田さんは死にました。遺書が二通、私と家内あてに残されていたんです。私あてのものは、ぼくの気持ちは判ってくれるだろう。とだけ書いてある。家内には、後始末を依頼してあり、自分の死体を焼いた灰は、花の肥料にでも使ってくれと記されていた。

私の首陽農園のすぐ先に、火葬場があったんです。入田さんの遺体はそこで焼かれ、私は骨を拾いました。その骨壺は、ずっと私があずかっていたのですが、一九四九年に私はつかまって、火焼島(現・緑島)の牢屋にいれられたでしょう。家族たちが処理に困り、台中の寶覺寺におさめた。だから、彼の骨は、いまでもその寺にあります。なんの手がかりもありませんが、もし、日本での遺族がみつければ、その骨をわたしてあげたいと思う。

この「対談」によれば、入田が息絶えたのは楊達が彼の部屋に来て、彼を病院に担ぎこんだ後のことになるので、楊達が部屋に入ったときはすでに入田は息絶えていたという前掲1976年のインタビューの内容とは大きく異なってくる。この「対談」でも二通の遺書や遺骨の始末について触れて

いる。

筆者は1997年9月に楊達の長男楊資崩に、1998年12月には楊達の長女楊秀俄¹⁶⁾(70才)にそれぞれインタビューした。彼らの談話によれば、当時、入田は夕食時楊家にやってくるようになっていた。その晩、入田がなかなかやっこないで、父親に言われて秀俄(9才)と弟の資崩(6才)はアパートまで走って入田を呼びに行った。部屋に着いたとき、入り口の鍵は掛かっていなかった。中を覗いてみると、入田はすでに布団の上で横になっており、声をかけても何も返事がなかった。そこで二人が家に戻って父親に知らせたところ、両親の楊達と葉陶は急いで入田春彦の部屋に駆けつけた。この二人の談話の内容は楊達が談話や文章の中で述べていることとはだいぶ異なっている。

一方、当時台湾最大の日本語日刊紙『臺灣日日新報』は1938(昭和13)年5月7日号で「元巡查自殺 前途を悲観してアパートで服毒」という標題を掲げ、入田の自殺事件を短く報道している。

(台中電話) 台中市寶町四五二寶町アパート十五室宮崎縣生まれ入田春彦(三一)は五日午後四時頃自室に閉じ籠った儘夕食も攝らず眠つているので不審に思ったアパートの婆さんが同十一時頃部室に入った所、同氏の枕許に注射薬やアダリンの箱を取乱したまま昏睡状態に陥つているので直ちに錦町派出所に届出、辻醫院に担送應急手當を施したが生命覚束ない、枕許には錦町派出所員及友人宛の遺書があり、死體の処置に關しても書残してあつた、同氏は三箇月前台中巡查を辭め前記場所に滞在、六日便船で帰省する事になつていたもので若い時から文學に興味を持ち、巡查時代某紙文藝欄に屢々寄稿していたが、最近〇〇で依願免となり、失職後失望の極この死途を選んだものらしい。

この記事は楊達についてはなにも触れていないが、一方、入田が催眠薬アダリンを飲んだ上さらに薬物注射もしたらしいことを記している。またこの記事によれば、入田は友人宛だけではなく、錦町派出所員宛にも遺書一通を残していたらしい。同紙は自殺理由は失業後の前途に対する失望だと述べ、しかも失業の理由を「〇〇で依願」免職とだけ記している。ここで伏せ字になっているのはおそらく「赤化」であろう。つまり入田が左翼運動に關係していたことを示唆していると思われる。

また、台南市の日本語日刊紙『台湾日報』1938(昭和13)年5月7日号にも「孤獨感と生活不安文學青年自殺 風変りな遺書を残して」という見出しで、入田春彦の自殺事件を次のように報道している。

(台中電話) 五日午後十時半頃台中市寶町四ノ五二寶町アパートの管理人が同アパート十五號室に寄宿する入田春彦氏(三一)が夕刻から自室に閉じ籠った儘姿を見せぬのに不審を懐き室に入つて見ると枕許に注射薬やアダリンの箱を取散した儘昏々と眠つているので直ちに錦町派出所に通報すると共に辻博士を迎へ應急手當を加へ辻醫院に入院せしめたが相當多量服薬した上劇薬二本を注射していた為生命覚束ない、枕許には錦町派出所員と二、三の友人に宛てた遺書、一風変わった自分の死體処置に關する箇條風の遺書等が置かれてあつた。同氏は元巡查をしていたが文學に深い興味を持ち、度々寄稿等をしていた、最近退職してからは一層文學に没頭し極端な孤獨主義者であつた、尚同氏は五日夜行で臺中を發ち、六日の便船で内地に帰る事となつていたものであるが精神的及物質的にさし迫つた環境とひしひしと迫る孤獨の哀愁感に神經衰弱が昂じ逝く春と共に覚悟の自殺を図つたものと見られている。

この記事も『臺灣日日新報』と大同小異であるが、派出所宛だけではなく、二、三の友人宛の

遺書のあったことを述べている。この記事で特に注目すべきなのは、「一風変わった自分の死體処置に関する箇条風の遺書等が置かれてあった」という一句である。これは「光復前後」の文章と1983年の「対談」で楊逵が言う「自分の死体を焼いた灰は、花の肥料にでも使ってくれと記されていた」のことを指しているにちがいない。しかし、この死体処理のことは、下に掲げる楊逵夫婦に宛てた遺書の中では一言も記されていないのである。しかも現存の楊逵・葉陶夫婦宛の遺書はこの記事の言うような箇条書きになっていない。おそらく現存の楊逵夫婦宛遺書のほかに遺体処理などを箇条書きにしたもう一通の別の遺書があったのではなからうか。楊逵夫婦宛の遺書の方はさいわいにも楊逵の遺族が大事に保管しており、拙稿ではじめて公開することができるのである。

葉陶 様

ぼくのことを一ばん、テキパキ処理してくれる人は、あなただと思って居ます。だから、ぼくは遠慮なく願ひします。こんな時代には、こんな戦いがあってもよいと思ひます。爆弾を抱いて、欣然と死地に赴く一兵卒の気もちの分かる人は、ぼくの気もちだって分かってくれるだろう、と思います。資崩坊には、「勝って来るぞ」を歌って貰ひます。資崩がぼくの年になった時には世の中は、どんなになつて居るだろうな。

楊逵 様

なにもかもお分かりのことと思ひます。もう何も書く必要もないのですが。戦ひです。汚さを感じてもらひたくありません。ぼくの中にもいろいろなものが生きて居ます。併し、芥川のニヒルは、まあ、三分か、多くみつもって四分位だと思つて居ます。この場合になって、芥川のニヒルをぼくが少し甘やかして居ることも事実です。併し、それは戦ひへ注ぐ油の役を荷はしたものです。芥川の、ニヒルを過重にみつもつて貰ひたくはありません。

これに対して楊逵は1938（昭和13）年5月18日の『臺灣新聞』に「入田君のことなど」という題名で追悼文を発表している。

入田君の遺骨は昨日の朝拾つて来て此処ににある。人間の一人は已に片付けたのだ。あの大きな男は、今この一尺立方にも足らない木箱に収まっている。決闘を言い、戦いをいうこの情熱の男は今ボロボロの骨片となって厳かにこの木箱の収まっている。

五月の四日迄は、あの大きな身體を彼獨特の歩き方で下駄をガタガタならしながら、時には日に二度もやって来て資崩を探したのだが、もう永久にあの風采もその下駄の声も聞かれなくなった。

葉陶への遺書で、彼は爆弾を抱いて欣然と死地に赴く一兵卒を氣負ったが、結局は爆弾と共に海におとし込んだ始末である。爆弾は終に不發に終わって、彼自身と共に海に、あの眼界のない海に吞まされた譯だ。この彼の偉大なる氣負いに驚いたのは、近処をうろついていた雑魚位なものであったらう。

何故もっと強く生き伸びなかつたのだと言つた後祭りの祭である。何故彼のようないい身體を僕がもたなかつたのだと云つたところで、これも愚痴である。

「何もかもお分かりのことと思ひます。もう何も書く必要もないのですが、戦ひです。汚さを感じてもらひたくありません。」

僕宛の遺書で彼はこう書き遺し、そして彼の中に生きて居る芥川のニヒルの分量を懸命になつ

て計っていたが、僕は僕なりに、彼の遺書通りに何もかも彼を理解し得たとしても、それが何の役にも立たう□彼が生きていてこんなことをぼくに云ったなら、ぼくはガンと鉄拳を喰わして泣いたであらう。が今となっては骨片を相手にして何が出来やう。

何れ、彼の一生について色々と考えなければならぬ。ぼくもそれを一つの負債としているが、今は肩から腰にかけて背中がうづくようだ。頭も重い。これから少し休まなければならぬ。が、今度の彼の服毒から死迄のその周囲の動きに、僕は非常な関心をもたされた。これもじっくりと考えねばならぬ。と云うのはつまり人間性の問題だ。人間らしく生きることの難儀さである。ぼくの次兄楊趕が服毒して死んだ時もそうだったが、要するに、どう言う□に高邁なる人間の脳髓か□にかな縛りされているか、高邁なる人間が、時代または制度に依って如か程迄に下劣になりうるのであるかと言うことだ。(五月十一日)

また、同紙には当時台北の放送局に勤めていた劇作家だった中山侑による「入田春彦君」という追悼文が載っている。これは入田の悩みや彼の感想・翻訳を記した分厚い文芸スクラップブックにも言及する貴重な資料であるが、3000字以上の長文であるため、ここではスクラップブックに関する部分だけを引くことにする。

貴方と藤野兄が、文學について色々と話されるのを、僕は黙つて聞いていたままでした。その時、貴方は自分の今までの感想やら翻譯やらをスクラップしたものがあるが、一遍讀んで貰へないだらうかと云はれ、僕はそれを引受け、他日お受けする事にして、いそがしい僕は別れて歸りました。その後、藤野君から、貴方のスクラップ・ブックを拜借し、ゆつくり讀んで、何か、批評でもと思つてゐましたが、ずぼらな僕はついそのままになってゐました。

暮れのあわたゞしさに何のもてなしも出来ず、やがて歸ると云はれるお二人を送つて、一緒に外へ出た僕は、夜ふけて、しんしんと降り始めた雨の中に、何か暗いものを感じ何故ともなく、貴方の身の上を案ぜずにはをれない様な氣さへするのです。やつと見つけたタクシーに乗つた貴方から、お借りしたスクラップブックの事を言はれた時まだ眼も通してない自分の怠惰を恥ぢて、ほとんど返す言葉もありませんでした。その夜雨の中に、消えて行く、貴方の車のテールライトを見送りながら、貴方の文學への道の、ひいては芸術の仕事の難さを、僕はしみじみと思つた事でした。

あゝ思へば、あの夜、あの雨の中にお送した貴方の顔が、此の世での貴方との最後なのでした。年が明けて、僕の記憶から、大晦日夜の感慨が薄らぐ頃、臺中から長距離電話が放送局へかかり、電話を通じて貴方の聲を聞いたのでした。「至急、あのスクラップブックを返して戴きたい」それは、何か逼迫した氣持ちを表してゐました。翌日、僕は大変暗い氣持ちで、そのスクラップブックをお送りした事を覚えてゐます。貴方としては真摯な氣持でその批判を期待されてゐたものをいそがしいとは云へ、無為にお返しする事へ絶えがたい自己嫌悪も手傳つた済まない氣持ちでした。

筆者が1997年9月に行ったインタビューで楊資崩氏は、入田は自殺の前このスクラップブックを彼自身の手で焼いてしまったと回想している。

五 転向者の文芸

ここで入田の文芸活動について一瞥しておきたい。1937（昭和12）年12月17日『臺灣新聞』の「學藝消息」欄では、入田春彦のことが次のように紹介されている。

入田春彦氏は別名郷親良、郷はるこ、高英、大伴英彦、洪春郷、六年間の警察生活を辞し、目下彰化温泉ホテルに滞在静養中、近日郷里に帰省の筈。

これによれば、彼がさまざまな筆名を用いて、いろいろな小品を発表していたことが判る。入田が生前よく投稿していた『臺灣新聞』はその残存状況が不明なため、筆者はいまだすべてを目にすることができずにいる。今は筆者が閲覧しえた部分に載っている作品から彼の文芸活動の一端を窺うほかはない。これらの作品を列挙すれば下記の如くである。

- ①郷はる子「マドリッドに於ける文化擁護國際作家會議」、『臺灣新聞』、1937（昭和12）年11月26日¹⁷⁾
- ②入田春彦「日録抄」、『臺灣新聞』、1937（昭和12）年12月17日
- ③入田春彦「新約異解」、『臺灣新聞』、1938（昭和13）4月1日
- ④高英「断片録」、『臺灣新聞』、1938（昭和13）4月1日

本名で発表された小文「新約異解」は「クリスト」「イスカリオテのユダ」「サロメ」と名付けられた三節よりなっている。「芥川のニヒル」という表現を好む入田が芥川龍之介の文学に深く傾倒していたことは疑いない。「新約異解」の体裁は芥川のキリストについてのアフォリズム集成である「西方の人」、『續西方の人』を念頭において綴られたものであろう。この小文で見る限り、自身キリスト教徒ではない入田にとってのキリストとは結局、古い倫理を打破し、新しい道を追求しつつ、思い悩む一人の心優しい人間である。このようなキリスト理解は、彼が親しんだ白樺派的人道主義の流れを汲むものとも考えられる。しかし、一方、入田個人の内面の葛藤を反映していると思われるのは、彼が「イスカリオテのユダ」について記している箇所である。おそらく入田はここで左翼からの転向者として今や帝国主義の手先である植民地警察に奉職している自分自身をユダに擬えているのではあるまいか。「クリストの流した血は、ユダも強く立ち直らせるものにちかない」という一句は入田自身の切実な心の叫びであろう。この句は芥川龍之介「さまよへる猶太人」の中の「罪をうけばこそ、贖ひもある」という言葉を想起させる¹⁸⁾。芥川龍之介も晩年ある程度まで左翼思想に傾倒したといわれている¹⁹⁾。芥川龍之介の自殺の一因を日本社会の矛盾に悩みながら、進んで革命運動に参加しえぬ無力感にもとめるなら、同じような無力感を懐く入田の好んだ「芥川のニヒル」という言葉の意味も明らかになるだろう。

入田が警察を退職した直後に発表した「日録抄」からは彼の日常生活と読書の一端が窺われる。彼はすでにかなり心身ともに疲労していたようすで「日録抄」のところどころには厳しい自省と自責の言葉が記されている。自殺の一ヶ月ほど前に発表した「断片録」もやはり一種の自省の文であるが、ここには入田の誠実な人柄と傷つきやすい性格がよく表れている。「断片録」の中で注目すべきは次の一節である。

ぼくも、はらを決めて死にもものぐるひに體あたりで、ぶつつかつて行くつもりだつた。だが、どうもをかしい不發弾なのだらうか。ぼくの顔は死人のやうに青ざめて居る。だが、いつかそれは安全装置かほどこされて居るやうである。

このあたりの表現は、入田の葉陶宛遺書に見える「爆弾を抱いて、欣然と死地に赴く一兵卒」という句とも符合する。

目下筆者の手元にある資料のみをもって入田春彦の自殺の原因を直接に知ることはほとんど不可能である。しかし楊達の回想を総合すれば、入田は平生日本警察を告発する文章を書き、また好ましからぬプロレタリア作家たる楊達に大金を贈ったため、台中警察の追求を受け、拘禁されることとなり、結局免職を余儀なくされた、ということになる。彼が警察との葛藤のほかには身体的・思想的・私生活的苦悩をも懐いていたことは確かである。例えば、上に引いた楊達の談話によれば入田春彦は当時彼が奉職していた台中警察の内部を告発する文章を著していたと考えられる。彼が警察に対して懐いていた不満、警察への批判が具体的にどのようなものであったのか。これは勿論入田春彦を論ずるとき、彼の自殺の動機を探ろうとするときの要点となる問題であるが、そのような告発文章が残されていない今となっては何も判らない。但し、入田春彦は1937（昭和12）年12月17日付『臺灣新聞』掲載の下に引く「日録抄」という文章で、「殖民地に於ける本國人の文化水準の低劣さ、どいつもこいつも Military-mania」という表現で台湾在住日本人への憤りをぶちまけている。

また、自殺の一因として無視し得ぬのは、彼の健康状態である。彼はもともと頑健な体質ではなく、前述したように練習所にいたころすでに病に倒れ、出所が遅れている。さらに当時の台湾の蕃界（原住民が住む山地）の中でも特に遅れていたカネトワン地域に一年四ヶ月駐在していたときにも心身の健康を害し、それが彼の悩みになっていたことは、彼の「日録抄」の「三七年一月二四日」の項に見える「山の中の一年四ヶ月の生活がぼくの體をこわしたやうにも思へる（こゝらあたりはいやなきもちで書いた）ことしの六月以降のぼくの體は平静ではない」や、上に掲げた中山侑の追悼文の中の一節「窮屈な山の中の警官生活は僕には耐へられない」から知ることができる。

一方、「断片録」の一節からは女性問題のあった可能性も浮上する。「あらゆる女の中にサロメは生きて居るのである」という文で終わる「新約異解」の第三節は、入田春彦自身の女性観を述べるものであると言えないこともない。また、一種の自由詩の形をとった「日録抄」の一節「ほれた女には、ほれたという。ほれても居ない女にほれたふりなどはしない。ほれた女にふられて、くやしかつたら一晩でもないて居よう。こつちが勝手にほれて、むかうが勝手にふつたのだ。だが、ぼくはいつまでもないては居ない、なくのは一晩でよい」は「ぼくの人生は女だけではない」という一行で結ばれている。このあたりから、彼の自殺の一因としてなんらかの女性問題があったのではなかったろうかという臆測もなしうるだろうか。

しかし、それにもまして重要な自殺の契機はやはり転向者としての苦悩ではなかったろうか。入田が台湾に来る前東京でどのような形で左翼運動に参加していたのか目下のところ不明であるが、「対談」の中で楊達は入田の左翼運動家としての前歴をかなりはっきりと表明している。左翼運動家が転向して身元調査の厳しいはずの警察官になることは当時必ずしもまれではなかった²⁰⁾。入田の親族には警察官もいたが²¹⁾、彼らの助力もあったのであろう。警察官となった後も懐いていた革新的理想を彼は「爆弾」と表現したのであろう。この「爆弾」も、社会変革への積極参加をなしえぬ入田にとっては「不発弾」となる。そのことによる彼の無力感こそが「芥川のニヒル」なのではあるまいか。また当時作られて間もない軍歌「露營の歌」（藪内喜一郎作詞、古関裕而作曲）を楊資崩に好んで歌って聞かせたということも、自分の社会変革の「一兵卒」たらんという願望をこの歌に託していたとは考えられないだろうか。

六 楊逵に魯迅を伝えた人

楊逵と入田との交友は楊逵文学において、また台湾文学史においてどのような意義をもつものであろうか。彼らはわずか一年の交友の間に文学・思想をめぐり、或いは日本帝国主義と植民地台湾、日中戦争などの諸問題についてなにを語り合ったのであろうか。具体的なことはなにも判らない。しかし、入田の経済的援助がなければ、楊逵が安定した作家活動を続けることはほとんど不可能であった。一方、入田が警察官の職を捨てることを余儀なくされたのはまさに警察にとっての要注目人物であった楊逵への援助が一大要因をなしていたと思われる。このように考えれば、二人の出会いと交友は二人の運命に決定的な影響を与えたと言ってよい。

ここで特記すべきは楊逵と入田の交友が一種独特の台日文化交流としての側面をもっていることである。入田が平生どのような本を読んでいたのかは、「日録抄」から知ることができる。ここで彼はアグネス・スメドレー、パールバック、ボロジン、トルストイ、アンリ・バルビュス、ゴリキイ、木下尚江、鹿地亘、宮本百合子、葉山嘉樹、藤森成吉などについて言及している。また書齋の入田を写した写真²²⁾には、彼の所蔵する大量の書籍も見えるが、これらのうちに『ボロジン脱出記』やショーロホフの『開かれた処女地』や、蔵原惟人の著書や、小林多喜二の評伝や有島武郎全集、武者小路実篤全集、スクラップブックとともに『大魯迅全集』全七巻もはっきりと写っている。これらの蔵書は入田の死後すべて楊逵のものとなったのである。

楊逵は入田と知り合う前から魯迅に対してなみなならぬ関心を懐いており、すでに『臺灣新文學』の1936年11月には、「魯迅を悼む」と題する巻頭言を無署名で載せている。戦後になると、まず魯迅死後九周年を記念して「記念魯迅」という詩を『和平日報』(1946年10月)に発表し²³⁾、また「阿Q正伝」の中日対照訳を作り²⁴⁾魯迅文学の台湾人への紹介に努めている。この対訳に収められた「魯迅先生」という短文は彼の魯迅観を知る上で重要である²⁵⁾。入田所有の魯迅全集について楊逵は「対談」の中で次のように語っている。

ところで、この入田さんの遺品の中に、改造社版の『魯迅全集』(一九三七年二月～八月刊行、全七巻)があり、私は彼の本を託されたことで、魯迅を本格的に読むことができたんです。

台湾の光復まで中国標準語を学ぶ機会のない台湾人が魯迅の作品に本格的に親しむことはできなかった。また翻訳であれ、彼の作品集を入手することも困難であった。このことは同「対談」で戴國輝氏が次のように述べている。

台湾の留学生には、東京においてすら、『魯迅全集』は禁書だった。ですから、台湾にこれを持ちこむのは、もっと難しかったと思うんです。入田春彦氏が『魯迅全集』を入手し、所持できたのは、やはり、日本人の一種の特権だったのではないのでしょうか。

つまり、楊逵が魯迅のまとまった作品集に親しむことができたのは、入田所有の『大魯迅全集』を受け継いでからのことであった。楊逵の魯迅文学の受容という問題は今後の研究課題であるが、入田春彦がはからずも楊逵への魯迅文学の仲介者となったことは明らかである。もちろん、入田春彦自身も魯迅に大きな感心を寄せていた。楊逵遺族の手元に残された入田春彦の原稿の残片の中では、魯迅の旧居のありさまが次のように述べられている。

文化への関心は魯迅の旧居へと足をはこぼせるのだった。

魯迅の晩年は蒋介石政権の追求が厳しく彼のことを以てすれば「ペンを執つて書くよりも足で逃げる方が忙しい」といった生活だった。

彼の旧居も今は赤い葛の葉の絡んだ白亜の壁を□□□□□魯迅□□□□又、対する思慕を今更のように反芻して居るらしいかつた。

ぼくはHさんの瞑想を妨げないようにと思つて、一人離れて裏口の方は廻つて見た。市政府の小役人ででもあるのだらうか、断髪、ハイヒールーの中年婦人が、チマリとしたプチブルの住居に変わつて居る。Hさんは魯迅生前に何回か彼のこの寓居を訪ねたらしく

これは入田春彦自身の回想では勿論ない。彼の読んだスメドレーなどの著作からの抜き書きの一節であつたと考えられる。台湾人作家が同時代の中国文学を日本人知識人であり、警察官でもある左翼転向者を通して受容したということは、植民地ならではの特異な現象と言えよう。ともあれ、入田は楊達に対して経済的援助を行ったのみならず、彼の文芸活動にも極めて重要な刺激を与えていたのであつた。なお、入田の蔵書は、楊資崩・楊建両氏の話によれば、戦後国民政府警察の追求が厳しさを増したときに手放さざるをえなくなったとのことである。

七 まとめ

以上、本稿では、楊達に多大な影響を及ぼした日本人警察官入田春彦の経歴および楊達と入田との交友について、目下できるところまでの解明を試みた。本稿は特定の結論を導き出すことよりも、まず入田春彦について、楊達と入田の交友について、すでに知りえた事柄を整理し紹介することを目的とするものであるから、全体として羅列的なものになってしまったという感は否めない。また、いまだ不明な事柄もいろいろと残っており、今後も関係者の搜索や関係資料の収集を続けて行きたいと考えている。

今回の調査により、入田春彦が渡台以前何らかの形で左翼運動に関わっていたこと、また彼が生活のため台湾で警察官になってからは台湾警察の暗部を知りうる立場におり、自己の職場と思想・良心との内的葛藤に悩んでいたことがほぼ明らかとなった。

このような葛藤を懐きながら文筆に親しむ入田春彦が左翼運動と農民運動の挫折に苦しんでいた台湾人作家楊達と交流するのはけだし自然の成りゆきである。さまざまな共通項を持っていた楊達と入田春彦の二人の交友は短いものであつたが、少なくとも楊達にとっては極めて有意義なものであつた。

入田春彦の不意の援助によってはじめて、楊達は生活を建て直し、自己の作家活動を続行していくことができた。また、楊達は入田春彦を通して、自己の文学的・思想的視野を拓けて行くことができた。楊達が入田との交友を通してはじめて魯迅文学に接することができたということは台湾文学史、また日台交流史においては特に重要な意味をもっているといえよう。

註

- 1) 河原功「台湾新文学の発刊」『台湾新文学運動の展開』（1997年11月、研文出版）222～230頁参照。
- 2) 以上、入田春彦と出会うまでの楊達の略歴については、『文藝』1983年3月号誌上（註5参照）の楊達の談話に従った。
- 3) 宋澤萊「不朽の老兵」（『師鐸』、1976年第4期、台北）
- 4) 楊達「光復前後」（『聯合報』1980年10月24日、台北）

- 5) 内村剛介, 戴國輝「一台湾作家の七十七年—五十年ぶりの来日を機に語る」(『文藝』1983年3月号)
- 6) 筆者は台湾引揚者団体である台湾協会の『会員名簿』(昭和59年10月版および平成7年9月版)をたよりに総督府警察の関係者に問い合わせたところ, そのうちの一人水越昇氏から返信がきた。同氏は入田のことは知っていたが, 彼の印象などは全然記憶にないという。また地元の警察本部に問い合わせるのが速いという助言を与えてくれた。実は入田の小品「日録抄」(『臺灣新聞』昭和12月17日号)では「三十七年十一月二七日」の日付で「夜, 水越さん, 佐藤さん十時十分前に入り替わりに来る。水越さんは疲れているらしい」と記しているが, この箇所について水越氏に再び問い合わせてみたが, やがてきた同氏の返事ではそのような記憶はないということであった。
- そこで, 宮崎県警察本部広報官の稲田三千男警視と『宮崎日日新聞』の寺原達也記者の協力を得て, 尋ね人の記事を同紙に掲載したところ, 早速これを見た入田春彦の甥の野元安生氏および他の近親の方々と宮崎市と日向市で対面することができたのである。その際には同県高岡町にある入田春彦の墓に詣で, いまなお健在である末妹の江藤タツ(81才)にインタビューすることができた。またすでに故人となった入田春彦の姉妹の遺族である子女たちから, 入田の出身や生い立ちについて詳しく聞くことができた。
- 7) 白石清泉編『宮崎縣大観』(1905年)159頁には, 入田安之進(筆者が閲覧した戸籍謄本によれば, 旧姓川添, 26才に入田モヨの養子になる)を「東諸縣郡高岡村助役 入田安之進君 東諸縣郡高岡町」の見出しで, 次のように紹介している。「君は旧鹿兒島の藩士にして, 明治五年九月十二日に生る。夙に農業に従事し, 二十年の頃より造林事業を企て, 着々好成绩を取む。二十八年高岡税務署に奉職し四十年まで同署にあり, 四十四年七月, 高岡村助役に擧げられて就任, 以て今日に至る。」
- また, 『高岡町史』の202頁によれば, 入田安之進の助役としての任期は1911(明治44)年7月25日から1914年(大正3)6月17日までの三年間である。
- 一方, 『宮崎大観』137頁では, 安之進の実兄川添亀之進を「従六位 農學士 川添亀之進君 東諸縣郡高岡町」の見出しで紹介している。「君は明治三年十月生る。二十九年高等中学造士館を出で, 東京帝國大學農科大學に入り, 三十七年七月卒業, 農學士の稱號を得, 同年福島縣蠶業學校教諭に任ぜられ, 次で同校長となる。三十八年十月山梨縣農林學校長に轉じ, 同縣技師を兼ね農桑の施設に従事す, 四十四年廣島縣技師に任ぜられ, 西條農學校長, 廣島縣農事試験場長を兼ね。大正三年三月三十一日任を辭して郷に帰る。」
- 8) 入田春彦は安之進の葬儀の写真一枚を故郷に送っただけであったので, 春彦の死後は残された姉妹は安之進・春彦親子の遺骨の所在を知ることができなかったが, 二人の墓石を故郷高岡町の墓地に建立した, と江藤タツ氏は筆者に語った。
- 9) 入田春彦の長姉野元チツの四女松山紀子氏とその夫君松山武正氏夫婦。
- 10) 鷲巢敦哉『臺灣總督府警察沿革誌』(全六冊, 昭和8年~17年, 台湾總督府), 『警察生活の打ち明け物語』(昭和9年, 個人出版, 台北), 『臺灣警察四十年史話』(昭和13年, 個人出版, 台北)
- 11) この葉書の内容は以下の通りである。「御ぶさたしすぎて申訳ありません。不肖病氣のため入院などいたし, 二月八日に練習所を出るはずのところ, 延引いたし四月十一日に左記のところに勤務する様になりました。とりあえず簡単に御通知申し上げます。病氣は全快しました。臺中州南投郡警察課 四月十六日 入田春彦」
- 12) 当時春彦の思い出を懐かしげに話してくれた楊資崩は1998年4月に他界した。
- 13) 『楊達影集』に収載, 1992年, 台北。
- 14) 春彦の妹江藤タツの談話によれば, 春彦の死後まもなく, 台中からの一通の電報によって兄の死亡を知らされた。しかし, 春彦が病死でなく自殺したことは入田家の人々には, 今回筆者が宮崎を訪問するまでは長い間知らされていなかった。
- 15) 1999年12月中旬, 入田春彦の姪の藤江綾子(72才)は夫君藤江隆夫とともに台湾に渡り, 楊建と筆者の案内で台中寶覺寺を訪問, 法会を行った後, 無事遺骨を引き取ることができた。台湾のマスコミ関係もこれを報道している。藤江綾子は春彦の長姉野元チツの長女で, 今回筆者が宮崎を訪問し, 入田春彦の在台の写真を見せるまでは叔父の顔を知らなかった。綾子は子供時代から母親が叔父春彦の遺骨のこ

とを心配していたのを知り、親孝行として師範学校を卒業した後の初任給で叔父の墓石を作ったのである。もし当時楊遼が入田春彦の遺骨を預からなかったら、もし楊資崩が遺骨を寺に預けなかったら、入田春彦親子の遺骨の60年後の里帰りはありえなかったはずである。

なお、1961年在台湾日本大使館が戦前台湾に散在する日本人の墓地遺骨を整理し、『物故者名簿』を作製した。筆者はこの名簿の中から入田安之進の名を発見し（「入田安之進〔埋葬地区：〕南投縣三塊厝」）、さらに、1997年5月台中寶覺寺を訪問してその遺骨の存在を確認した。入田親子遺骨を引き取ることができるのは、当時春彦の遺骨を楊遼夫婦の名義で納めた楊遼夫婦の近親者に限られるので、筆者は楊建と連絡し、同氏と再び寶覺寺を訪ねた。寺務所で楊建の身元証明を行った後、遺骨引き取りの手続きを進めることができた。

- 16) 当時9才の楊秀俄は入田春彦がとても好きであったが、内気な性格のため彼と話すことはあまりなかった。ただ、彼からときどきキャンディーなどをもらうのを楽しみにしていた。
- 17) 1937年11月26日付き『臺灣新聞』を筆者ははまだ閲覧しえずにいるので、同紙に郷はる子というペンネームで発表された一文がどのようなものであるのかわからない。この文の存在は「日録抄」の1937年11月26日の條の記載から知ることができる。おそらくは同年7月にスペインのマドリッドにて開催された第二回文化擁護國際作家會議についての感想のようなものであろう。『世界文化』1937年10月号に載った「パリへ移った第二回文化擁護國際作家大會」という関口弘の報告を読めば、この大会は親ソビエト、反ファシズムの親左翼的文学者がスペインの人民戦線派政権支援の目的で開催したものであることがわかる。入田春彦は『世界文化』に載ったこの報告を読んでそれについての自分なりの感想をまとめ『臺灣新聞』に寄稿したのであろう。このような文の存在は入田春彦が國際的左翼文学の動向になみなみにならぬ関心を懐いていたことを示している。
- 18) 藤井省三「さまよえるユダヤ人伝説をめぐって」『現代中国の輪郭』（1993年、自由国民社）13-21頁参照。
- 19) 宮本顕治「敗北の文学——芥川龍之介の文学について」『宮本顕治文芸評論選集』第1巻（1980年、新日本出版社）3-32頁参照
- 20) 宮下弘『特高の回想——ある時代の証言』（1980年、田畑書店）24-27頁参照。
- 21) 1997年5月筆者が宮崎を訪ねたとき、入田の妹江藤タツの話では、春彦の二番目の姉リツの夫君梅橋秀雄は当時警察官を勤めていた。また、いまでも入田の親類には何人かの警察官がいる。
- 22) 『楊遼影集』に収載、註11参照。この写真の中で入田春彦が着ている着物は、妹タツの談話によれば、春彦の姉妹たちが一緒に着地を買い、協力して縫いあげて、渡台直前の春彦に贈ったものである。
- 23) 下村作次郎「戦後初期台湾文壇と魯迅」（中島利郎編『台湾新文学と魯迅』、1997年、東方書店）141頁参照。黄英哲「魯迅思想の伝播をめぐって——台湾文化における「中国化」と「世界化」の相克」（同書所収）172頁参照。
- 24) この対訳は『中国文芸叢書』に収められている。陳芳明（山内一恵訳）「台湾における魯迅」（『台湾新文学と魯迅』所収）19頁参照。
- 25) 陳芳明前掲論文19-20頁、下村作次郎前掲論文140-142頁、黄英哲前掲論文173-174頁参照。

（入田春彦の調査を進めるにあたり、さまざまな御協力御助言を惜しまれなかった皆様に、ここに謹んで感謝の意を表したい。）

（文中敬称略）